SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

教職形成に関する調査研究(I)：新任教師と大学1年生に対する質問紙調査結果の分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2015-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山﨑, 準二, 江刺, 佳世子, 梅澤, 収 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008429

静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　№7 p.125～138（2001）

《論文・実践報告》

教職形成に関する調査研究（Ⅰ）
－新任教師と大学１年生に対する質問紙調査結果の分析－

A Research on Shaping Identities
among newly-appointed Teachers and first-grade Students（Ⅰ）

山崎準二*・江刺佳世子**・梅澤　収***
Junji YAMAZAKI, Kayoko ESASHI and Osamu UMEZAWA

（平成13年１月９日受理）

０．はじめに：本報告の目的

本報告は、２つの調査における２種類の方法によって得られたライフヒストリー資料を分析の対象とした、新任教師と現役大学１年生の「教職形成」に関する調査報告の内、質問紙調査結果を統計的に分析した部分の報告である。２つの調査とは、これまで山崎が実施してきた「教師の力量形成に関する継続調査」の第４回目（1999年８月）調査(注1)と、江刺が実施した「教職観の形成に関する調査」（2000年６－７月）のことであり、２種類の方法とは、その２つの調査において用いられた質問紙による調査と対象者の中から数名を選び行われたインタビュー調査のことである。この２つの調査内容には比較が可能となるように同一の質問を設定しておいた（ただし、対象者全員が現職教師である前者の調査と必ずしも教職を志望ではない学生も含んでいる後者の調査とでは両者の結果を単純に比較できないことはいうまでもない）。

前者の山崎による調査は、静岡大学教育学部を卒業して主に小・中学校教師となった者を卒業年次毎５年間隔の10つのコーホート（これを卒業コーホート：と呼称）に編成し、調査対象者として実施されてきているものであり、後者の江刺による調査は、静岡大学教育学部１年に在籍する学生を調査対象者として実施されたものである。したがって前者の調査における一番若いコーホート（第10ＧＣ）に対して、後者の調査における現役大学１年生は次回５回目継続調査予定（2004年）の第11ＧＣ候補者たちという関係にあたる。

前者の調査結果の一部については別稿(注2)において報告してあるが、本報告は主に上の第10ＧＣと第11ＧＣ候補者たちの比較考察を中心にしたものである。２つの若いコーホートに属する者たちにおける、被教育体験においてであった教師からの影響、教育学部への入学動機や教職選択意識、大学生活での諸経験、教職に就いて新任期経験、そしてそれらの諸経験を通して形成された教職観や教職イメージなどについて、質問紙調査結果を分析することによって明らかにしていくことが本報告の中心目的である。なお、表題における「教職形成」という用語使用には、教職に就く以前の段階から教職に就いて以後の教師としてのアイデンティティの確立が果たされる段階までを視野に入れて、教職意識などがどのように形成されていくのかということを明らかにしていきたいという狙いが込められている。　（はじめにの文責・山崎）

*学校教育（教授）　**静岡大学大学院教育学研究科院生　***学校教育（助教授）

1．調査の実施概要

(1)　質問紙調査とインタビュー調査

まず、2つの調査と2種類の方法によって実施された調査の実施概要をあらためて整理して記しておくならば次のようである。

【「教師の力量形成に関する継続調査」の第4回目調査：以下「力量調査」と呼称】

・調査対象者：静岡大学教育学部卒業生の中で小・中学校教師として静岡県下に就職した者を卒業年次毎5年間隔で編成した10つのコーホート

・調査方法A：上記の調査対象者に対する郵送法による自己記入式質問紙調査

調査方法B：上記の調査対象者で第10GCに属する者の中から男女それぞれ2名、計4名に対するインタビュー調査（山崎が面接し聞き取り）

・実施時期：調査方法Aは1999年8月、調査方法Bは2000年8月

【「教職観の形成に関する調査」：以下「教職観調査」と呼称】

・調査対象者：静岡大学教育学部1年生（2000年4月入学生）

・調査方法A：上記の調査対象者に対する集合面接法による自己記入式質問紙調査

調査方法B：上記の調査対象者の中から学校教育教員養成課程発達教育学専攻教育実践学専修の9名に対するインタビュー調査（江刺が面接し聞き取り）

・実施時期：調査方法Aは2000年6－7月、調査方法Bは2000年7－8月

以上の調査における回収率は《**図表1**》のようである。「力量調査」第4回目調査の回収率は、残念ながら過去3回と比べて、初めて5割を下回ってしまい47.8%であったが、それでもこの種の郵送法による調査としては高い方だといえよう。年齢の高いGCは回収率が高く、第7－9GC（第4回調査時点で30歳代～20歳代後半の子育て時期）の回収率が相対的に低いが、それぞれの生活の忙しさが反映した結果であろう。また回収されたものの男女の構成比率は、第5GCにおいてほぼ同率に近くなっており、それより年輩のGCにおいては男性の比率が高く、逆に若手のGCにおいては女性の比率の方が高くなっている（ただし第8GCの結果のみ

《図表1》アンケート調査対象者の構成

呼称 ＼ 項目 卒業・入学年月	回答者数：(性別構成比) 男　性	女　性	合　計 人数（回収率）
第1GC	1952.3-54.3	———	———	———
第2GC	1957.3-59.3	159（76.1%）	50（23.9%）	209（65.1）
第3GC	1962.3-64.3	128（68.1%）	60（31.9%）	188（58.6）
第4GC	1967.3-69.3	75（57.3%）	56（42.7%）	131（45.6）
第5GC	1972.3-74.3	64（51.2%）	61（48.8%）	125（47.2）
第6GC	1977.3-79.3	57（41.0%）	82（59.0%）	139（43.7）
第7GC	1983.3	49（45.8%）	58（54.2%）	107（41.5）
第8GC	1988.3	38（59.4%）	26（40.6%）	64（34.8）
第9GC	1992.3-93.3	31（39.7%）	47（60.3%）	78（35.6）
第10GC	1997.3-99.3	31（34.1%）	60（65.9%）	91（46.7）
現職総計		632（55.8%）	500（44.2%）	1132（47.8）
学部学生	2000.4 入学	92（30.1%）	214（69.9%）	306（74.3）

《図表２》調査対象者が大学入学頃の実家生業（ＧＣ内構成比を表記：％）

	2GC	3GC	4GC	5GC	6GC	7GC	8GC	9GC	10GC	学生
学校教員	17.2	26.1	15.3	17.6	9.4	10.3	10.9	12.8	4.4	10.8
農林水鉱業	23.9	25.0	19.8	17.6	21.6	8.4	4.7	9.0	2.2	3.3
自営商工業	12.9	13.3	17.6	17.6	12.2	13.1	15.6	6.4	13.2	11.4
専門自由業	1.0	2.7	0.0	0.8	0.0	1.9	3.1	0.0	0.0	2.0
一般公務員	13.9	10.1	17.6	14.4	10.1	15.9	14.1	11.5	8.8	14.7
事務系勤人	5.3	4.3	7.6	6.4	10.8	15.0	6.3	21.8	18.7	16.0
作業系勤人	7.2	6.9	7.6	18.4	23.0	24.3	21.9	21.8	28.6	18.6
役員管理職	2.4	1.6	1.5	0.8	2.9	3.7	12.5	9.0	11.0	11.1
サービス業	2.9	2.1	3.1	3.2	5.0	3.7	6.3	5.1	6.6	5.9
その他	12.0	7.4	9.2	3.2	4.3	3.7	4.7	2.6	4.4	4.2

※「無回答」は表記から除いた。

《図表３》教職に就いた頃、身近に教師がいたか（退職者を含む）（％）

	2GC	3GC	4GC	5GC	6GC	7GC	8GC	9GC	10GC	学生
父母が教師	8.6	11.2	4.6	8.0	5.0	5.6	6.3	7.7	3.3	7.5
父母及び親族中に教師	15.8	20.7	12.2	13.6	5.0	8.4	6.3	9.0	0.0	8.2
親族中に教師	34.9	34.0	38.2	20.8	30.2	26.2	34.4	24.4	27.5	37.3
親しい知人に教師	10.0	5.9	5.3	5.6	5.8	6.5	9.4	9.0	8.8	5.9
身近には全くいない	30.1	27.1	39.7	51.2	53.2	53.3	43.8	50.0	42.6	39.5

※「無回答」「その他」は未表記

異なる)。この回収結果は、静岡大学教育学部への入学者男女比率の経年変化を、さらには静岡県の小・中学校における教師男女比率の経年変化をも、ほぼ反映しているといってよい。

また、2000年４月の新入生は実数412人（男135人：女277人＝32.8％：67.2％）であるから、「教職観調査」の回収率は74.3％ということになり、男女比についてもほぼ母集団を反映しているといえよう。

(2) 調査対象者の属性構成とその特徴

さて次に、調査対象者の属性構成とその特徴を確認しておきたい。《図表２》は、調査対象者たちの大学入学頃の実家生業をたずねた結果を記したものである。年齢が上のＧＣに相対的に多かった「学校教員」や「農林水鉱業」は年齢が若いＧＣになるに従って少なくなり、「事務系勤人（いわゆる「ホワイトカラー」)」や「作業系勤人（いわゆる「ブルーカラー」)」が相対的に多くなってきている。「自営商工業」や「一般公務員」はＧＣ毎に大きな違いはなく、平均して１割強程度である。

また《図表３》は、「調査対象者が教職に就いた頃、教職に就いていた者が身近にいたか」どうかをたずねた結果を記したものである。目立つ特徴としては、年齢の高いＧＣにおいては父母のどちらか、あるいは親族の中に教職者がいた者の比率が高いのに対して、年齢が若いＧＣになるほど低くなっていることである。したがって、従来から感覚的に言われ続けてきた「親もまた教師である者が教師には多い」という指摘は、この調査結果を見る限り、若い教師層においては当てはまらないといえよう。このことは、（後述するように）年齢の若いＧＣの者たちが教職選択する際の要因という点において、「親や身内の者の影響」が少なくなり、自らの被教育体験の中で出会った「小・中・高校教師の影響」が大きくなってきていることにも

《図表４》調査対象者生育史の時代的背景：1980―90年代の主な出来事

10GC	１年生		社会動向	教育動向	事件
誕生		1975			
誕生		1976			
		1977		指導要領改訂「ゆとりと充実」	
		1978			
		1979	第二次オイルショック		
	誕生	1980		関経「教育改革への提言」	
	誕生	1981	円高		鹿川裕史君（いじめ自殺）
小学校入学		1982			
小学校入学		1983		中教審「自己教育力の育成」	
		1984		臨教審「個性重視」「変化への対応」	
		1985			
		1986			
	小学校入学	1987	大学入試、分離分割方式	教課審答申「生活科」	
中学入学	小学校入学	1988			卒業アルバム事件（清水）
中学入学		1989	天安門・東独崩壊・消費税		
		1990			神戸女子高生校門圧死
高校入学		1991	湾岸戦争・ソ連邦消滅	中教審「絶対評価」へ	
高校入学		1992		学校５日制スタート	
	中学入学	1993			
浪人	中学入学	1994	震災・「児童の権利条約」公布		大河内清輝君（いじめ自殺）
大学入学		1995			（全国でいじめ自殺が多発）
	高校入学	1996		中教審「生きる力」、教育内容の厳選	
	高校入学	1997			神戸児童殺傷事件
新任		1998		指導要領改訂「総合的な学習の時間」	教師刺殺事件（黒磯市）
	浪人	1999			千葉・栃木でいじめ自殺
	大学入学	2000			少年事件あいつぐ

反映している。

本報告で着目している新任期教師の第10ＧＣと現役大学１年生の生まれ育ってきた時代的背景にも触れておきたい。《図表４》は、両者の生育史を年表風に表わしたものである。第10ＧＣは1970年代中頃に、１年生は1980年代初頭に、それぞれ生れているが、社会全体は２度にわたるオイルショックを経験し、高度成長から低成長社会へと移行してきていた。また彼（女）らが中学校に進学する1990年前後は、湾岸戦争、東欧・ソ連崩壊、阪神大震災と世界と日本を大きく揺さぶる出来事が続出した時期でもあった。教育界の動向は、すでに「教育内容の現代化」路線の時期は過ぎ、1977年の学習指導要領改訂による「ゆとりと充実」路線の時期に入り、さらに1988年改訂による「生活科」導入や1990年代に入っての学校五日制スタートなどが起こってきていた。その中で、彼（女）らは小・中・高校生活を送ることとなったのである。しかし、そのようないわゆる「人間化」「ゆとり」路線の推進の一方で、子どもをめぐる状況は次第に厳しくかつ深刻な事態を呈してきており、「いじめ」「自殺」「管理主義」「不登校」、さらには「凶悪な暴力事件」などが続出し、大きな社会問題としてマスコミを賑わすようにもなってきている。彼（女）らの被教育体験期はこのような事態の進行と重なっている。

（第１章の文責・山崎）

２．教職選択：その時期・要因、教育学部選択、教職イメージ形成

職業としての教職に就く以前の、どの段階において、何をきっかけとして、教職が自己の職業として意識され、選択されるのか。その点に関連する質問内容の統計的処理結果をもとに、教職選択の時期、その要因、教育学部への入学動機、について、年齢の高いＧＣとの比較も視野に入れながら、以下考察していきたい。

(1)　教職選択の時期・要因

「自分の職業として教職を心に決めた時期（教職選択の時期）」をたずねた結果は、《図表５―ａ，ｂ》に見られる通りである。現役学生に対する調査には、選択肢の中に「決めていない」という項目を追加したが、その選択率がいちばん高く33.0％（女性36.0％）であった。続いて「中学校の頃」と「小学校の頃」が高く、両項目で36.2％に上っており、第10ＧＣのそれが47.3

《図表５－ａ》自分の職業として教職を心に決めた時期（％）

	2GC	3GC	4GC	5GC	6GC	7GC	8GC	9GC	10GC	学生
小学校の頃	8.1	13.3	13.7	10.4	10.1	16.8	17.2	21.8	20.9	16.3
中学校の頃	11.0	20.2	11.5	16.8	12.2	18.7	23.4	23.1	26.4	19.9
高校１・２年	10.0	12.2	11.5	18.4	12.2	7.5	14.1	9.0	9.9	10.1
高校３年の頃	35.4	27.1	25.2	16.0	18.7	28.0	14.1	14.1	7.7	15.4
浪人の頃	6.2	1.1	0.8	3.2	0.7	0.9	0.0	5.1	3.3	——
大学入学の頃	13.9	13.3	11.5	8.8	12.9	11.2	7.8	1.3	2.2	4.6
教養部の頃	1.9	1.6	5.3	2.4	1.4	0.0	0.0	0.0	1.1	——
学部進学後	2.9	1.1	6.1	6.4	5.0	2.8	4.7	7.7	11.0	——
教育実習以後	6.2	8.0	11.5	14.4	23.7	13.1	17.2	14.1	12.1	——
決めていない	——	——	——	——	——	——	——	——	——	33.0

※「その他」「無回答」は未表記

《図表５－ｂ》自分の職業として教職を心に決めた時期（主な時期項目の男女間の比率：％）

	2GC		3GC		4GC		5GC		6GC	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
小・中学校の頃	13.2	38.0	26.6	48.3	21.3	30.3	25.0	29.5	17.3	24.4
高校３年の頃	37.1	30.0	29.7	21.7	28.0	21.4	12.5	19.7	19.3	18.3
教育実習以後	6.3	6.0	9.4	5.0	12.0	10.7	18.8	9.8	28.1	20.7
決めていない	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

7GC		8GC		9GC		10GC		学生	
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
32.7	37.9	39.5	42.3	22.6	59.6	45.2	48.4	36.9	36.0
26.5	29.3	15.8	11.5	22.6	8.5	9.7	6.7	21.7	12.6
16.3	10.3	13.2	23.1	16.1	12.8	9.7	13.3	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	26.1	36.0

※「小・中学校の頃」とは、「小学校の頃」と「中学校の頃」という２つの項目をまとめた数値である

《図表６－ａ》自分の職業として教職を心に決めた一番大きなきっかけ（％）

	2GC	3GC	4GC	5GC	6GC	7GC	8GC	9GC	10GC	学生
小・中・高の教師の影響	28.7	26.1	29.8	36.0	33.8	50.5	40.6	43.6	48.4	39.2
大学の教師の影響	0.0	0.5	0.0	0.0	0.7	0.9	0.0	0.0	1.1	0.0
親・身内の者の影響	28.7	39.4	25.2	18.4	12.2	11.2	12.5	20.5	7.7	6.9
友人からの影響	3.8	1.1	2.3	2.4	0.0	0.9	1.6	2.6	0.0	0.7
TV・映画・小説の影響	1.9	1.1	1.5	0.8	4.3	3.7	3.1	2.6	2.2	2.9
教育に対する不満	2.9	3.2	1.5	2.4	1.4	0.0	1.6	1.3	2.2	4.9
経済的に安定・有	5.7	3.2	9.2	4.0	10.8	7.5	3.1	3.8	2.2	3.6
労働条件面で良い	1.0	1.6	1.5	0.8	0.7	2.8	0.0	1.3	0.0	0.3
家庭教師・塾講師の経験	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.0	0.0	1.1	0.3
サークル等の経験	0.5	2.1	3.1	6.4	1.4	0.0	1.6	0.0	3.3	4.2
教育実習の経験	5.7	6.4	12.2	14.4	18.7	11.2	17.2	14.1	16.5	0.0
大学における専門の学習	2.9	1.6	2.3	1.6	2.2	0.0	0.0	0.0	1.1	2.3
教職関係科目の学習	0.0	1.1	0.8	0.8	0.7	0.9	1.6	1.3	2.2	0.7

※「その他」「わからない」「無回答」は未表記

《図表６－ｂ》自分の職業として教職を心に決めた一番大きなきっかけ（主な項目における男女の比率：％）

	2GC		3GC		4GC		5GC		6GC	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
小・中・高の教師の影響	27.7	32.0	27.3	23.3	25.3	35.7	34.4	37.7	24.6	40.2
親・身内の者の影響	27.7	32.0	34.4	50.0	22.7	28.7	17.2	19.7	15.8	9.8
教育実習の経験	7.5	0.0	7.0	5.0	16.0	7.1	18.8	9.8	28.1	12.2

7GC		8GC		9GC		10GC		学生	
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
49.0	51.7	42.1	38.5	51.6	38.3	54.8	45.0	42.4	37.9
8.2	13.8	10.5	15.4	12.9	25.5	3.2	10.0	6.5	7.0
14.3	8.6	15.8	19.2	19.4	10.6	9.7	20.0	0.0	0.0
						「決めていない」→		13.0	25.2

％（中学：26.4％＋小学：20.9％）である結果ともあわせて、若い教師及び教育学部入学生が比較的早い段階で教職志望を形成している実態が読み取れる。また両項目における男女の違いという点に目をやると、第９ＧＣまでが女性に指摘率が高かったのに対して、第10ＧＣと現役学生においては男女の違いがなくなり、男性においてもさらに教職選択の早期化傾向が進んできていることが読み取れる結果となっている。第10ＧＣと現役学生との違いという点では、大学進学選択の時期と重なっている「高校３年の頃」に若干みられ現役学生（特に男性）の指摘率の相対的高さが特徴となっている。大学進学選択が教師養成を主な目的とした教育学部への進路選択であるということを考えるならば、大学進路選択と職業選択とが結びついているという傾向は男性の場合の方がより明確であると言えよう。

《**図表６－ａ，ｂ**》は、「自分の職業として教職を心に決めたいちばん大きなきっかけ（教職選択の要因）をたずねた結果である。第２－３ＧＣの年輩教師層においては「親ないしは身内の者の影響」が大きく、第５ＧＣ以下では「小・中・高校で教わった教師の影響」がそれを大きく上回って主要な要因になっていることがわかる。現役学生においては、上でみたように教職選択を「決めていない」とする者が「わからない」という項目を選択するなど未だ答えづらい質問であったように思われるが、それでも若い現職教師たちと同様「小・中・高校教師の影響」を指摘する者が相対的に高く、彼（女）らの教職選択は被教育体験の中で出会った教師からの影響が大きいことが読みとれる。現職教師に一定の指摘率を得ている「教育実習の経験」は、現役学生の場合は１年生の段階では未だ未経験のため当然のことながら指摘率は得ていない。

男女差という点に目をやると、第２－４ＧＣの年輩教師層において「親ないしは身内の者の影響」が大きいという傾向は、特に女性教師の比率によって支えられており、第９－10ＧＣの20歳代の教師層において「小・中・高校で教わった教師の影響」が大きいという傾向は、特に男性教師の比率によって支えられていることがわかる。そして現役学生の結果も同様の傾向を引き継いでいるといえよう。

(2)　教育学部選択

《**図表７**》は、「静岡大学教育学部に入学した理由」を順位を付けて第２位までたずねた結果である。現職教師全体としては、各ＧＣとも、「教師になりたいから」を第１位に指摘した者の割合が相対的に高いこと（特に第７ＧＣ以降の若手教師層において）、「私学よりも学費が安く、金がかからないと思ったから」を第２位に指摘した者の割合が約２割程度と一定していること（特に第２－７ＧＣにおいて）、が特徴的である。これらの点に関しては、男女による比率の大きな違いは認められなかった。全体としては各ＧＣ共通して教育学部入学時点に「教師になりたい」という明確な教職志望意識を持った者たちを５割前後は抱えながらも、各ＧＣ間における相違点として次のような特徴が浮かび上がってくる。

すなわち、第２－３ＧＣの教職選択の早期傾向がみられるが、それは、「小・中・高校教師の影響」という被教育体験に加えて、先に見てきたように父母・親族など身近な存在の中に教師がいた生活環境の中で、比較的早く子どもの頃から教職選択の要因として「親ないしは身内の者の影響」を受け、教育学部への進学も「親や身内の者にすすめられた」ことを直接的なきっかけとしているという事実を反映しているのである。そしてそのような教職選択は、日本が未だ本格的な高度経済成長を果たす以前の時代の中で、その教職選択へ周囲から寄せられる薦めと支持とを背景としていたのである。

《図表７》静岡大学教育学部入学選択の理由（上段：第１位に指摘、下段：第２位に指摘）（%）

	2GC	3GC	4GC	5GC	6GC	7GC	8GC	9GC	10GC	学生
教師になりたいから	35.4	43.1	40.5	38.4	43.2	54.2	54.7	57.7	53.8	21.6
	4.8	7.4	3.8	8.0	6.5	9.3	6.3	9.0	13.2	8.2
専門勉強したい	3.8	3.2	1.5	4.0	7.9	8.4	6.3	10.3	8.8	32.7
	3.8	1.6	2.3	3.2	0.0	4.7	3.1	2.6	7.7	9.2
特定の教授の講義・	0.5	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
指導を希望して	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.3	1.1	1.6
合格しやすい成績	11.0	8.5	14.5	12.8	15.8	6.5	9.4	5.1	3.3	9.2
	6.7	9.6	14.5	11.2	10.8	14.0	9.4	11.5	9.9	16.0
ネームバリュー	0.5	1.6	0.0	0.8	2.2	0.0	1.6	0.0	3.3	2.3
	1.4	1.6	0.0	4.0	2.9	0.0	0.0	3.8	4.4	5.9
地元就職に有利	4.8	4.3	3.1	5.6	7.2	8.4	12.5	6.4	7.7	7.5
	7.7	8.0	8.4	16.8	20.9	19.6	29.7	34.6	25.3	7.8
学費やすい	10.0	5.9	9.2	12.0	6.5	11.2	3.1	6.4	1.1	5.2
	23.4	18.1	28.2	27.2	23.7	19.6	25.0	6.4	12.1	21.6
自宅から通学可能	4.8	8.0	12.2	4.0	7.9	3.7	3.1	3.8	4.4	8.2
	18.7	16.0	15.3	14.4	17.3	18.7	9.4	11.5	16.5	2.9
高校教師の薦め	1.0	0.5	2.3	2.4	0.7	1.9	1.6	1.3	1.1	1.6
	4.3	2.1	6.9	0.8	0.7	4.7	1.6	2.6	3.3	3.9
親・身内の薦め	8.1	9.0	5.3	4.0	1.4	0.9	1.6	1.3	2.2	1.6
	10.5	13.3	6.1	5.6	7.9	3.7	6.3	6.4	2.2	2.6
次善の選択として	5.7	2.7	6.1	10.4	6.5	0.9	1.6	2.6	9.9	7.8
第１志望校不合格	1.9	6.9	7.6	2.4	6.5	0.9	0.0	2.6	2.2	5.2
なんとなく	1.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	1.6
	1.9	1.1	0.0	0.8	0.0	0.9	4.7	2.6	0.0	2.9

※「その他」「無回答」は未表記

第４－７ＧＣにおける教職選択の遅期傾向の出現は、教育学部への入学理由の変化からもうかがわれる。すなわち、中堅教師層を中心とするこれらのＧＣは、他のＧＣと比較して、「合格しやすい成績であった」を理由として指摘する率が相対的に多く、この入学理由ゆえに教職選択を保留したままで教育実習を迎えた者たちの存在が大きくなってきたからである。彼（女）らはいわゆる「団塊の世代」と呼ばれ、彼（女）らの中学・高校時代は次第に高校進学率や大学・短大進学率が上昇し、それに伴って受験競争もまた次第にエスカレートし始めてきた時代でもあった。

そして第８ＧＣ以降の、とくに男性教師に象徴的に見られる教職選択の早期傾向の復活は、教職選択時期が「小・中学校の頃」で、教職選択要因が「小・中・高校の教師の影響」であると回答した者が多いこと、加えて第８ＧＣの卒業時（1988年）の前年頃から増加基調にあるといわれる（労働省『雇用動向調査』）いわゆる「Ｕターン就職」傾向を反映して教育学部入学選択の理由も「地元就職に有利」と回答する者の比率が増加してきたことを背景としている。教職への就職率が次第に低下してきたとはいえ、教師採用者数の絶対的減少という本格的な厳しさは第９ＧＣの卒業直後からのことであった。

以上のような現職教師にみられる特徴は、現役学生の場合はどうであろうか。「教師になりたいから」が20%程度にとどまっているのは教職選択を「決めていない」学生も多く含んでいることの反映であると思われるが、「地元就職に有利」（第２位の指摘率）も大幅に減少している。これも県外出身者を多く含んでいることの反映であることは否めないが、近年の教育学部における教師就職率の極端な落ち込みをも反映しているのではないかと思われる。

他方で「専門勉強したい」（第１位の指摘率）や「合格しやすい成績」「学費安い」（共に第２位の指摘率）の指摘率が高まっている点も特徴的である。いずれも教職を未だ志望してはい

ない女子学生の意識が反映された結果であると思われるが、不況という時代背景の中で、他の一般学部よりも受験偏差値の点で比較的入学しやすいという国立大学教育学部の背負わされている客観的役割がやや表に現れてきた結果でもあるといえないだろうか。

(3) 教職イメージ形成

ｉ）出会った教師からの影響

「教師の影響から教職志望」と答えた者の人数が多いことは、前述の通りである。より詳しく教師の影響の有無と、どのような影響であったのかをたずねた結果が《図表８》である。現役大学生に関しては、全体傾向とともに男女別の処理を行い表記しているが、第10ＧＣに関しては、回答者実数が91人のため男女別に考察することは無理と判断し、全体傾向のみで現役大学生と比較考察することにした（大学生と第10ＧＣにおける男女の比率はほぼ同様で３対７である）。

大学に入るまでの被教育体験の中で「影響を与えた教師がいたかどうか」に対して「いた」と答えた者は第10ＧＣは91.2%、大学生は84.3%という高い数値であった。それはどの学校段階の教師であったのかをさらにたずねた。表記されている数値は、第10ＧＣの場合は単一選択であり（しかも無回答者が４分の１以上生れてしまっている）、大学生の場合は複数選択であったため、単純には比較できないという制約が生れてしまった。しかし、第10ＧＣは小・中学校段階の教師を、大学生は小・中・高校段階の教師を、それぞれ念頭においていることを前提として次の影響内容の回答を考察していきたい。

「影響内容」は、「その他」を入れた16の項目から成り、複数選択可で回答を求めた。また内容的には、大きくは選択肢番号１～５までの「主に子どもとの関わりに関する事柄」、同６～10の「主に教育実践の方法に関する事柄」。そして同11～15の「主に教師あるいは人間としての生き方に関する事柄」の３つに分類されている。第10ＧＣにおいては、「13. 物事に対して常に情熱をもって、前向きに取り組むこと」や「４. 子どもとよく遊び、交流を持ち、体当たりで接すること」の２項目が指摘率４割を越えており目立っている。続いて「２. 一人ひとりの子どもの心の内面をとらえ、それに理解と共感を示すこと」や「３. 時に応じては厳しく叱るなど、良い意味での厳しさを持つこと」の２項目が４割近くの指摘率を示しており、全体として「主に子どもとの関わりに関する事柄」に多くの指摘が寄せられていると読み取れよう。

それに対して大学生は、「13. 物事に対して常に情熱をもって、前向きに取り組むこと」に比較的高い指摘率が寄せられていること（特に男子学生）は第10ＧＣと同様であるが、

《図表８》大学までの被教育体験の中で、あなたの教職志望や教職イメージ形成に影響を与えた教師の有無・段階・影響内容（%）

		第10ＧＣ 全体	現役大学生 全体	男	女
存在	有り	91.2	84.3	88.0	82.7
	無し	8.8	15.7	12.0	17.3
段階	小学校	28.9	33.3	34.8	32.7
	中学校	26.5	37.3	41.3	35.5
	高　校	9.6	37.3	43.5	34.6
	大　学	6.0	2.0	3.3	1.4
	その他	1.2	1.6	0.0	2.3
	無回答	27.7	—	—	—
影響内容（複数選択可）	1. 子ども平等	20.5	19.9	18.5	20.6
	2. 子ども理解	38.5	32.7	25.0	36.0
	3. 子ども叱る	37.3	42.8	45.7	41.6
	4. 子ども交流	42.2	32.0	33.7	31.3
	5. 子ども相談	24.1	32.0	29.3	33.2
	6. 専門的知識	26.5	20.6	20.7	20.6
	7. 授業の準備	9.6	13.1	15.2	12.1
	8. 授業の工夫	36.1	37.9	38.0	37.9
	9. 学級の指導	12.0	11.8	10.9	12.1
	10. 生活指導等	31.3	32.4	34.8	31.3
	11. 常に勉強	18.1	21.2	22.8	20.6
	12. 職業に誇り	30.1	22.9	25.0	22.0
	13. 物事に情熱	49.4	37.6	43.5	35.0
	14. 常に誠実	32.5	24.2	25.0	23.8
	15. 精神的若さ	25.3	24.8	22.8	25.7
	16. 反面教師	10.8	10.8	12.0	10.3

※第10ＧＣは回答者実数が91人のため男女別処理は行っていない
※現役大学生の「段階」%値は各段階においていたかどうかを訪ね結果（複数回答）の数値を示しており、単一回答結果の数値である第10ＧＣの%値と単純に比較はできない

それを上回って「3．時に応じては厳しく叱るなど、良い意味での厳しさを持つこと」にも高い指摘率が寄せられており（この点は男女共通）特徴的である。さらに男女別に比較的多かった影響の事柄を取り上げてみると、男子学生の中で特に支持が多かった項目のなかには、「8．授業の方法・技術を自分で創意工夫し、たえず子どもたちを引きつけておくこと」や「10．教科指導以外の生活指導や部活指導、あるいは進路指導にも熱心に力を注ぐこと」という「主に教育実践の方法に関する事柄」があること、女子学生の中で特に支持が多かった項目のなかには、「2．一人ひとりの子どもの心の内面をとらえ、それに理解と共感を示すこと」や「5．個人的な悩み事の相談にも親身になって応ずること」という「主に子どもとの関わりに関する事柄」があることが、それぞれ特徴的であるといえよう。

ii）影響を与えたメディア

「今までに読んだ本・雑誌・テレビ番組などの中で、職業として教職を選んだことに影響を及ぼしたと思われるものはあるか」との質問に対し、自由記述で3つまで回答してもらうことによって、教職イメージの形成に影響を与えたメディア等を把握しようとした。その結果を整理したものが《**図表9**》である。過去3回の調査結果も同様であったが第1～7ＧＣにおいては、壷井栄の『二十四の瞳』が多くの支持を集めている。しかし、第7ＧＣから『兎の眼』を代表作とする灰谷健次郎の小説やテレビドラマ番組『金八先生』や『熱中時代』が登場してきて、第8ＧＣ（1999年調査時30歳代前半）以降の若い世代において一層大きな影響を及ぼすものとなっていることがわかる。第10ＧＣになると彼（女）らの中学・高校時代に放映・上映されたテレビ番組や外国の学校教師を主人公とした映画などが登場してきている。第8ＧＣの世代あたりから学校教師の理想像は取り上げられている作品等に象徴されるように大きく変化を遂げてきているのではないだろうか。

このような傾向はさらに大学1年生においても続いており、ちょうど彼（女）らが教育学部

《図表9》教職に就く以前に読んだ本・見たり聞いたりした映画・ラジオ・テレビ番組の中で、職業として教職を選択したことに影響を及ぼしたもの（1999年第4回目調査と学生教職観調査の結果）

―3つまで自由記述されたもののうち上位5位まで表記、（ ）内は指摘件数、【 】内は総指摘件数―

	第1位	第2位	第3位	第4位	第5・6位	
第2ＧＣ【158】	壷井 栄 (40)『二十四の瞳』	夏目漱石 (10)『坊ちゃん』他	ルソー (6)『エミール』他	島崎藤村 (6)『破戒』他	下村湖人 (3)『次郎物語』	
第3ＧＣ【176】	壷井 栄 (51)『二十四の瞳』	石川達三 (13)『人間の壁』	下村湖人 (8)『次郎物語』	島崎藤村 (8)『破戒』他	夏目漱石 (7)『坊ちゃん』他	
第4ＧＣ【101】	壷井 栄 (30)『二十四の瞳』	斉藤喜博著作(12)『島小の女教師』	無着成恭 (5)『山びこ学校』	石川達三 (3)『人間の壁』	下村湖人 (8)『次郎物語』	新田次郎 (3)『聖職の碑』
第5ＧＣ【102】	壷井 栄 (24)『二十四の瞳』	石川達三 (7)『人間の壁』	下村湖人 (6)『次郎物語』	新田次郎 (5)『聖職の碑』	夏目漱石 (5)『坊ちゃん』他	
第6ＧＣ【96】	壷井 栄 (21)『二十四の瞳』	石川達三 (6)『人間の壁』他	灰谷健次郎 (6)『兎の眼』他	斉藤喜博著作(4)『島小の女教師』他	新田次郎 (4)『聖職の碑』	
第7ＧＣ【74】	壷井 栄 (16)『二十四の瞳』	灰谷健次郎 (10)『兎の眼』他	テレビ番組 (10)『熱中時代』	テレビ番組 (9)『金八先生』		
第8ＧＣ【46】	テレビ番組 (14)『金八先生』	テレビ番組 (6)『熱中時代』	壷井 栄 (5)『二十四の瞳』	灰谷健次郎 (3)『兎の眼』他		
第9ＧＣ【41】	テレビ番組 (8)『金八先生』	灰谷健次郎 (8)『兎の眼』他	テレビ番組 (4)『熱中時代』	壷井 栄 (3)『二十四の瞳』		
第10ＧＣ【61】	灰谷健次郎 (16)『兎の眼』他	映 画 (6)『今を生きる』	テレビ番組 (4)『教師びんびん物語』	壷井 栄 (4)『二十四の瞳』	映 画 (4)『陽のあたる教室』	
大学1年生【165】	テレビ番組 (40)『金八先生』	灰谷健次郎 (13)『兎の眼』他	テレビ番組 (12)『GTO』	壷井 栄 (8)『二十四の瞳』	映 画 (5)『陽のあたる教室』	

進学をめざして受験勉強に励んでいる時に再度放映されていたテレビドラマ『金八先生』が大きな支持を集めることとなっている。この番組は悪質ないじめや学級崩壊、諸処の問題の根本にある学歴社会など今の問題を取り上げ、見ている者も次の展開に息を呑む状況の中で、子どもや子どもを取り巻く状況に真摯に向き合う金八先生の姿がある。若い先生も登場し、全体に年齢層によって異なる子どもへの対応の仕方の違いなども表現されており現実味がある。「一人一人の子どもの内面にどれだけ迫ることができるか」に焦点が置かれているところは、多くの教師になりたいと思っている学生の問題意識のあり方にぴったりくるものがあるのだろう。

（第２章の文責：江刺）

３．教職観と教職イメージ

(1)　教職観

教職観については、「Ａ．学問研究への深い造詣が必要である」「Ｂ．教材・教科書・教授方法を決定する権限が与えられなければならない」という２項目が専門職的側面を、「Ｃ．経済的には多少恵まれなくとも清貧に甘んじなければならない」「Ｄ．次代を担う青少年を育成しているという強い使命感をもたなければならない」という２項目が聖職者的側面を、「Ｅ．自分達の仕事をより充実したものとするため職場の労働条件や賃金について団結して改善していかなければならない」「Ｆ．子どもの将来のためにも日本の政治や平和の問題にも積極的に発言していかねばならない」という２項目が労働者的側面を、それぞれ象徴するものとして設定されており、いずれについてもその項目内容に対する態度を５段階尺度法で求めた。**《図表10～15》**はその結果を、年齢の高いＧＣのデータとも比較する形で表わしたものである。

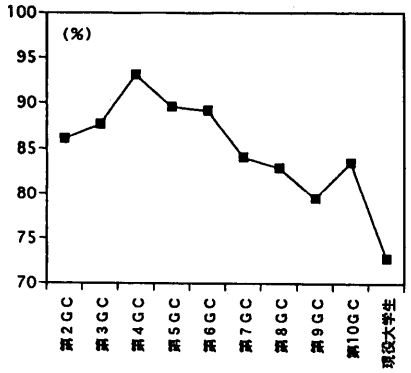
まず専門職的側面に関してであるが、「Ａ．学問研究への深い造詣が必要である」は、いずれのＧＣ・学生とも支持率が７割を越えており、全体として肯定的な反応であるといえようが、年齢が低いＧＣ・学生になるにしたがってその肯定的反応が低くなっていることもまた特徴的である。「Ｂ．教材・教科書・教授方法を決定する権限が与えられなければならない」についても、若いＧＣの肯定的反応が低い点で同様であるが、大学生の肯定的反応に関しては急上昇している点が他の項目と異なった特徴として目立っている。

学生への調査は高校を卒業して半年足らずのアンケートである。全員が教職志望で教師になる訳でもない。そのため学生の答えは「教師の視点」よりは「生徒」としての視点で答えている場合が多いと思われる。そのため「Ａ．学問研究」はイメージとして浮かびにくく、「Ｂ．教材等決定権限」については90年代の学校現場において比較的多様な形態の授業を受けてきたことを背景として「教師には工夫の余地がある」とイメージしたのではないかと推測される。

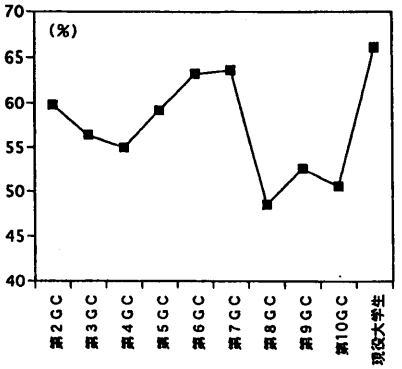
次に労働者的側面に関しては、「Ｅ．自分達の仕事をより充実したものとするため職場の労働条件や賃金について団結して改善していかなければならない」「Ｆ．子どもの将来のためにも日本の政治や平和の問題にも積極的に発言していかねばならない」の２項目とも若い教師や学生の肯定的反応が低く落ち込んできている。労働組合運動的・政治的な色合いの濃い上記２項目の見解についてはやや抵抗感を覚えるのであろうか。それらの世代の育ってきた社会的動向や大学生活のあり様を反映しているのではないだろうか。

しかし、20歳代前半の新任期教師である第10ＧＣの反応と比較して学生の肯定的反応が若干ながらも上昇しているのは、不況で社会全体の経済不安が増し大学生のうちから労働条件や賃金についての意識が少し高まってきているのか、あるいは近年の社会的政治的変動の中で大学生世代の目も社会や政治に少し向き始めてきているのだろうか、今後の検討課題である。

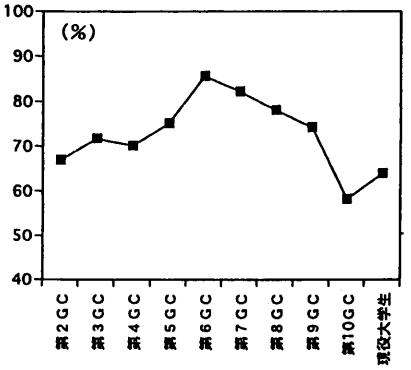
《図表10》「A．教師は学問研究への深い造詣が必要である」（数値は「非常にそう思う」+「どちらかといえばそう思う」の%値）



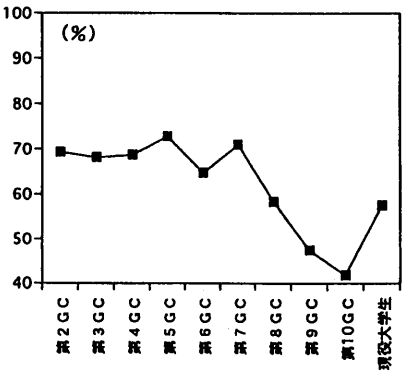
《図表11》「B．教師は教材・教科書・教授方法を決定する権限が与えられなければならない」（数値は「非常にそう思う」+「どちらかといえばそう思う」の%値）



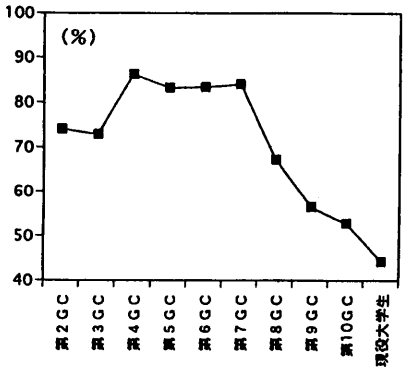
《図表12》「E．教師は自分たちの仕事をより充実したものとするために職場の労働条件や賃金について団結して改善をしていかねばならない」（数値は「非常にそう思う」+「どちらかといえばそう思う」の%値）



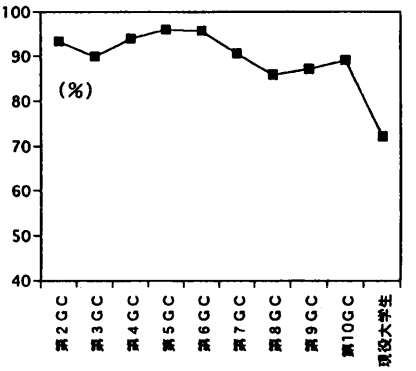
《図表13》「F．教師は子どもの将来のためにも日本の政治や平和の問題にも積極的に発言していかねばならない」（数値は「非常にそう思う」+「どちらかといえばそう思う」の%値）



《図表14》「C．教師は経済的には多少恵まれなくても清貧に甘んじなければならない」（数値は「全くそう思わない」+「どちらかといえばそう思わない」の%値）



《図表15》「D．教師は次代を担う青少年を育成しているという強い使命感をもたなければならない」（数値は「非常にそう思う」+「どちらかといえばそう思う」の%値）



ではさらに聖職者的側面に関してはどうであろうか。労働者的側面の見解にやや抵抗感を示した若い教師や学生であったが、「C．経済的には多少恵まれなくとも清貧に甘んじなければならない」にも中堅及び年輩教師たちほど否定的反応を示していない。しかし、「D．次代を担う青少年を育成しているという強い使命感をもたなければならない」という項目についても学生は現職教師たちとは異なってやや肯定的反応がやや低い態度を示す結果となった。

教職は他の職業と比べて使命感を覚える職業ではあるが、だからといって清貧に甘んじるほどの聖職者意識をもつような特別な職業でも無くなってきていることは確かであるが、若い教師たちや学生たちにおいて「清貧」への否定反応の低下は特徴的な結果であった。

(2)　教職イメージ

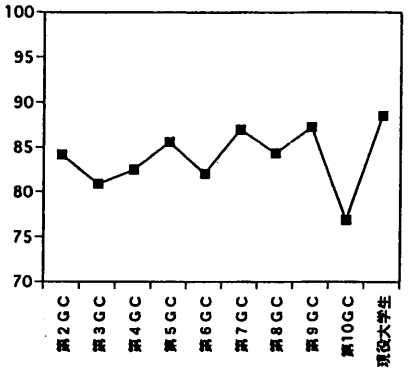
現職教師と大学生に、それぞれ抱いている教職イメージをたずねてみた。両者の結果を比較できるよう一部の項目を同一に設定しておいたが、問いかけ方は若干異なる。すなわち、現職教師の場合は「現在までの教職生活を振り返ってみた時、教職に就いた当初と比べ、学校や教師に対するイメージはどのように変わりましたか」という問いかけ方であり、大学生の場合は「これまで出会った学校や教師に対するイメージはどのようなものですか」という問いかけ方であった。したがって両者の結果を単純に比較することはできないという制約を前提とした上で、《**図表16～21**》のように表わしてみた。

各ＧＣ及び大学生がほぼ共通した結果を示したものとして、「A．教師の仕事量」と「B．仕事上の創意工夫の生かせる可能性」の２項目がある。「A．教師の仕事量」が「多い」と答えた者は、全体として８～９割にも上っており、この点での認識が大学生も含めて一致している。「B．仕事上の創意工夫の生かせる可能性」が「大きい」と答えた者は、およそ４～６割程度と判断されるが、第９－10ＧＣ及び大学生にやや期待感も込められた肯定的反応がみられる。

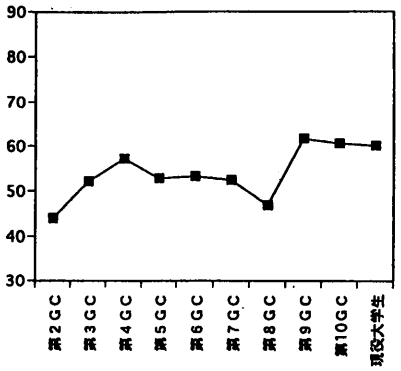
第９－10ＧＣ及び大学生にやや期待感も込められた肯定的反応がみられるという点では、「C．教職という仕事のやりがい」「D．教師に対する父母の期待」「E．教師への管理・統制体制」「F．教師に対する世間の目」の４項目にも同様な結果が示されている。年齢的に30歳代以上の現職教師からの前二者への反応はいずれも否定的な反応であったが、とりわけ新任期教師である第10ＧＣや大学生からは、「C．やりがい」では８割以上から「大きい」、「D．父母の期待」では６～７割から「大きい」という肯定的反応が寄せられてきている。また「E．管理・統制体制」と「F．世間の目」の２項目は表記が異なっており、「E．管理・統制体制」を「きつい」と感じている者の割合、「F．世間の目」が「冷たい」と感じている者の割合が示されている。したがって第９－10ＧＣ及び大学生においてそれらの数値が他のＧＣよりも低下している事実は、相対的にであるがやや期待感も込められた肯定的反応がみられるということを意味している。

いずれにしても全体として現職教師たちから寄せられた教職をめぐるイメージは否定的な色合いが濃いものであること、それに対して未だ新任期にある第10ＧＣや大学生たちから寄せられたイメージには相対的にではあるが期待感が込められた肯定的な反応が若干見られることを特徴としている。しかし、これまでの「力量調査」の３回にわたる継続調査結果の分析によれば、新任期を過ぎて20歳代後半以降、肯定的イメージは急激に否定的イメージへと変容していく。今回、上のような反応を寄せた第10ＧＣや大学生たちが、今後どのようなイメージ変容を遂げていくのか、これまでの分析結果と同じなのか、それとも異なった変容を示していくのか、今後の継続調査の課題である。　（第３章の文責：山崎・江刺）

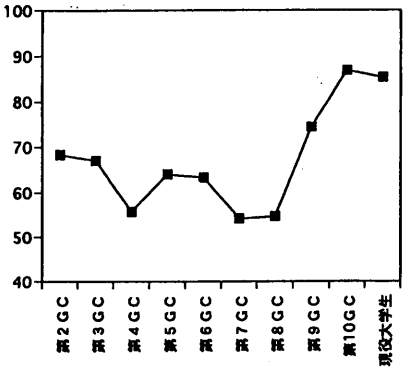
《図表16》「A．教師の仕事量は」（数値は「とても多いと思う」+「やや多いと思う」の%値）



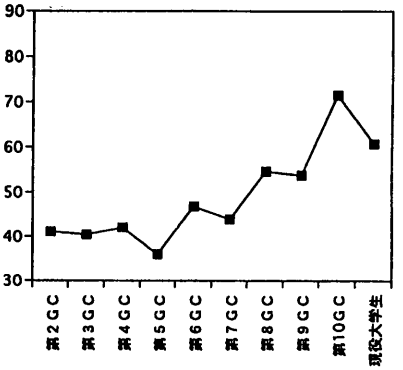
《図表17》「B．仕事上の創意工夫の生かせる可能性は」（数値は「とても大きいと思う」+「やや大きいと思う」の%値）



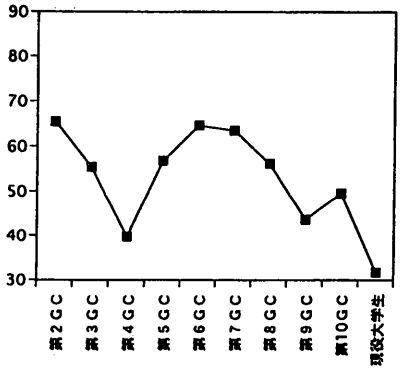
《図表18》「C．教職という仕事のやりがいは」（数値は「とても大きいと思う」+「やや大きいと思う」の%値）



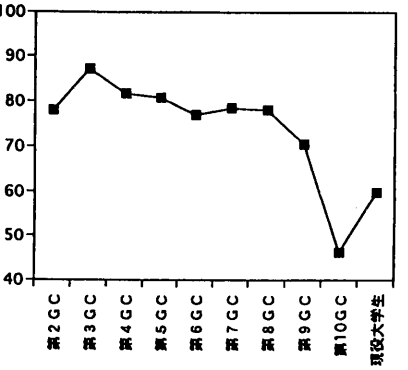
《図表19》「D．教師に対する父母の期待は」（数値は「とても大きいと思う」+「やや大きいと思う」の%値）



《図表20》「E．教師への管理・統制は」（数値は「とてもきついと思う」+「ややきついと思う」の%値）



《図表21》「F．教師に対する世間の目は」（数値は「とても冷たいと思う」+「やや冷たいと思う」の%値）



4．まとめ

第10ＧＣと第11ＧＣ候補者たちの比較考察を中心にして、彼らの被教育諸体験を通して形成された教職観や教職イメージについて、単純には比較できない部分は多少ありつつも、統計的調査によって明らかにしてきた。また世代の異なる各ＧＣとの比較をしたために、新任教師と学生の両者を含む「若者層」に特有であるのか、または「学生」「新任教師」という立場に特有であるかがより分かり易くなったと思う。

初めに述べたように、今回の調査はアイデンティティの確立と言うことも視野に入れている。学生と新任教師の違いが特徴的に表れた項目としては、「影響を受けた教師」が新任教師と学生の間において支持される項目が異なっていた。教職観では全体に「学生」と「新任教師」の違いよりはむしろ近い世代の「若輩層」としての傾向が見られた。教職イメージに関しては、学生と新任期とではイメージが異なったものもあれば、同じような傾向を示したものもあった。単純に「学生」と「新任教師」を比較することはできないが、あえて言うならば教師になれば「学問研究の必要性を感じるようになり」、「使命感を持つようになる」傾向があり、それがアイデンティティの確立においても何らかの役割を果たしていると言えるかもしれない。

今回の調査において未だはっきりしていないところは、第10ＧＣと第11ＧＣ候補者たちの違いが、または年輩層と若輩層の違いが、社会的立場や年齢による違いなのか、それともその世代特有のものであるのかという側面である。明確に、「学生」「教師」という立場による違いか世代による違いかをより明確にするためには、現在の第11ＧＣ候補者たちと５年後の彼らを比較することが妥当であろう。それに関しては、５年後、10年後の継続調査に期待したい。

（まとめの文責：梅澤・江刺）

【注　記】

（注１）

過去３回にわたる質問紙結果の報告に関しては、以下のものを参照願いたい。

・山崎・小森・紅林・河村「教師の力量形成に関する調査研究―静岡大学教育学部の８つの卒業コーホートを同一対象とした1984年調査及び1989年追跡調査の結果の比較分析報告」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第41号、1991年３月、223－252ページ

・山崎「第12章　教師のライフコースと成長－卒業生追跡調査を通して」『日本の教師文化』東京大学出版会、1994年１月、223－247ページ、稲垣忠彦・久冨善之編

・山崎・紅林「教師の力量形成に関する調査研究（Ⅱ）―第３回（1994）継続調査報告：前２回の調査結果との比較分析を中心に―」『前掲研究報告（人文・社会科学篇）』第46号、1996年３月、159－187ページ

・山崎「教師の力量形成に関する調査研究（Ⅲ）―９つのコーホートの教職意識分析―」『前掲研究報告（人文・社会科学篇）』第49号、1999年３月、259-290ページ

（注２）

・山崎・紅林「教師の力量形成に関する調査研究（Ⅳ）―第４回目（1999）調査結果の分析報告―」『前掲研究報告（人文・社会科学篇）』第51号、2001年３月